

東部七八電信隊入隊

満州新京七五八〇部隊初年兵教育

入ソ 昭和二十年九月 ブラゴエチエンス

ク

昭和二十年十月 ライチハー

復員 昭和二十四年九月四日

復員後の役職

青年団長 区長 消防団長 農村下水道組合長

土地改良役員 神社総代 実行組合長 抑留者協

会役員 農業委員

(千葉県 兼平 正二)

北支より地獄のシベリア抑留記

千葉県 堀越 宗悦

昭和十九(一九四四)年十二月十日繰上げ検査で現役兵として、柏の東部八十三部隊へ入隊する。当時は静岡県の大地震で東海道線は不通で中央線で先発し博多で一泊し、映画・亀山公園の見学等で最後の一日を楽しんだ。後発隊と合流し、米潜水艦の出没する日本海博多港より夜陰に乗り駆逐艦の護衛で出航した。十二月の玄界灘は大陸から吹き付ける強風で波が荒いと聞いていたが折悪しく天候が急変、雹が甲板を叩く。三千トン級の船は木の葉のごとく大揺れ。船首が上った時は良いが、逆に船首が下った時はスクリュウの空回転でこのまま海中に沈んでしまうのかと同年兵は皆備え付けの洗面器を抱えっぱなし。もう口や腹から出る物は何も無い。早朝釜山港は波も静まり全員上陸、元気を取り戻す。列車は朝鮮半島を縦断、

鴨緑江を通過、満州へ。奉天（瀋陽）、山海関より北支へ、北京からは万里の長城を右の山麓に眺め弘師団本部の在る新郷着、更に龍海線に乗り替え開封の旅団本部に一泊し、更に二十キロ東の蘭風の二〇五大隊に到着し岡田大隊長の訓辞があり、関兵分列行進を行い、更に南へ二十キロ杞県の第四中隊へトラック輸送で約八十人の初年兵は配属された。

北支の攻防戦から満州へ

二十年正月明けより三カ月の厳しい現地教育が開始され、郊外の野外演習中の二、三月ごろになると「黄塵万丈」天候は急変、現地の人々も恐れている砂嵐、日中でも真暗くなり雷鳴も伴い、方向感覚も失うものであり戦争も演習もできない、直に兵舎へ早駆けで帰隊するのであった。

一期の検閲を無事終了、八十人の初年兵は全員二つ星となり一人前の兵隊となるのも束の間、弘一七師団、独歩二〇五大隊には第三次河南作戦に出動命令が下達された。

米空軍の制空権下、洛陽より南へ奥深く激しい攻防戦を展開、ほとんどが払暁黎明攻撃であった。七月初めの早朝またP51かと思いきや突然二百メートル上空に現れたのは真赤な日の丸の友軍機ではないか、部隊は歓喜思わず万歳を叫んだ。この零戦が「部隊は直に原隊に帰れ」の命令で直に反転、日中は山野で休止、日没より連夜の眠って歩いた強行軍、カーブでは一人二人と銃を担いで折り重なって倒れ、一同ハッと目を覚まし、また歩く。長途の行軍で鄭州より列車に乗り込み駐屯地の杞県の四中隊より息つく間もなく風雲急な満州へ転戦。山海関付近の車中で八月九日午前〇時ソ連軍は日ソ中立条約を一方的に破棄しソ満国境侵攻のニュースを知る。

部隊はやがて大混乱の新京（長春）駅に到着、命令受領で指揮班は関東軍司令部へ、直に南新京へ後退、新装なつたばかりの桜ヶ丘女学校を宿舍に、外蒙古、葛根廟、白城子方面より侵攻中のソ連軍迎撃の任に着いた。郊外の陣地構築と現役兵

の独身者で編成された特攻隊となり三十六個の黄色爆弾を装填された破甲爆雷を背負い日夜猛特訓が続行された。

明日に迫ったソ連軍の四十トン戦車迎撃の準備すべて完了した。付近の交番からお巡りさんが、「兵隊さん正午に重大放送がある」と駆け込んで来た。

南新京で敗戦

猛暑の南新京の交番で聞いた八月十五日の陛下の玉音放送は無条件降伏であった。戦争は敗けたのだ、今まで張り詰めていた心身ともに空白となり茫然となるも部隊は直に重要書類の焼却、深夜ともなれば北支戦線を生き抜いてきた戦友は敗戦のショックで手榴弾爆破による自殺者が毎夜続いた。

ソ連兵は昼夜の別なく兵舎内に入り込み腕時計、万年筆等の略奪を極め、また奥地から引き揚げて来る婦人達は髪は坊主刈り、顔には鍋墨を塗り軍服着用、男装となるもソ連兵の暴行は目に余るも

のがあった。新天地を求めて渡満し敗戦時の一般居留民の苦労は筆舌に尽くし難く、現地に在った者でなければ分からない。

武装解除

南新京より公主嶺の戦車隊まで満州は既に雨期となり外被着用するもびしょ濡れの行軍。途中、日本軍に対し満軍の反乱、高射砲の水平射撃「耳をつんざく爆破音」で多くの悼ましい犠牲者が続出した。日本軍は武器弾薬は携行しているのであるがソ連軍からは満軍に対する抵抗は堅く禁じられていた。

戦車隊に到着するや北支戦線で活躍した三八式歩兵銃の菊の御紋章をヤスリで消し銃剣と護身用の手榴弾のすべてを返納した。

満州と決別

九月下旬部隊は一千人単位の作業大隊が編成され、ハルピン駅よりソ連監視兵に外から施錠され虜囚列車の身となり興安嶺越えは機関車が前後に付いて、のろのろ走行。二段式構造の貨車内はす

し詰め状態で用便以外は外に出られない。ソ満国境の満州里よりソ連入り、駅舎はソ連機に破壊されていた。チタを過ぎ列車はやがてバイカル湖畔を走ること丸一日、世界最大の湖といわれ日本海と間違えた者も多数あった。イルクーツクより更に西へ三百キロ、炭坑の町チエレンホーボ第八ラ―ゲル収容所着。全員裸にされ嚴重な装具検査でめぼしい品はすべて没収され、二重張りの有刺鉄線が張り巡らされ四つ角の高い望楼からは監視の目を光らせ、近付く者には容赦なくマンドリン銃を発砲し、射殺された者は多数あった。

半地下式の大きなソ連軍の兵舎で弘の作業大隊が最初に入所しての作業は製材所より松板運搬、四人用寝台造り、トイレの穴掘り。兵舎より二百メートルも離れている所へ四メートル×十メートルもある大きな穴の上へ丸太を二本あて並べた野外共同トイレであった。これがやがて十一月ともなれば足場も大便も凍り付き苦勞した。

露天掘り炭坑開始

一カ月遅れで入所してきたのは、やはり終戦直前北支より入満した陣六十三師団の一部の一千人と関東軍司令部の八百人、計二千八百人が第八ラ―ゲルへ収容された。

チエレンホーボには以前からシトリナヤ坑内炭坑等数箇所あったと思われませんが、新たに街より四キロぐらい離れた白樺林の伐採から始まり、穴掘りと二人用の板の「モツコ」で土運搬の八時間の重労働、朝食はエンバクのお粥、中蓋すりきり一杯の少量で、満腹感は更になく、昼食用の黒パン少量も二食分食べてしまえば夕方四時まで飲まず食わずの連続であった。

地下二メートルも掘ると真つ黒な石炭の様な土と変わり五メートルぐらい下は無尽蔵の良質の石炭であった。十月末より本格化された露天掘り作業は三交替となり、八時から十六時、十六時から二十四時と、特に夜の十二時より明日の八時までの深夜作業は骨身に応え厳しいものであった。飢餓と過酷な労働で体力はみるみる消耗。衛生状

態も極度に悪く虱と南京虫による伝染病が大発生。赤痢、発疹チフスと栄養失調の追い討ちで友はバタバタと倒れ、収容所の谷鉄馬連隊長「関東軍司令部」出身と我が弘の二〇五大隊長が相次いで亡くなられた。この発疹チフスで星野部隊長は四〇度の高熱で意識不明となりソ連軍医が薬と偽ってウオツカを口に注ぎついに他界された。部隊長だけは軍服を着たまま木箱に入れて埋葬したいと再三の願いでようやく許可された。部下思いの部隊長の死は収容所内、弘部隊の全員に大きな悲しみと一層の不安を募らせた。

疲れ果て収容所へ帰れば更に次の仕事が待っていた。亡くなられた友の埋葬です。ロスケがハツパをかけてからの穴掘り作業、馬糞に積み重ねられ運ばれてきた骨と皮に変わり果てた十数体の遺体はカラン、カランと音がする。花も線香もなく合掌作業は夜明けまで続いた。この埋葬作業は十一月から一月ごろまで健康な者で毎日交替で行われた。この間に亡くなられた人、「ジマ」の地方病

院に入院された人が併せて九百人以上にも及んだといわれた。

ついに盲腸患者と変わり果て

収容所内は伝染病も治まりシベリアにも春の兆しが見え始め、雪解けの始まった五月、作業から帰り、深夜の腹痛と吐気の繰り返し発作があり、翌日は同僚に担架で医務室へ運ばれ診断を受ける。医務室には関東軍の盲腸博士と言われた綿谷軍医大尉が「直に手術だ」と言っても、収容所付のソ連軍医は局部を温めて一昼夜様子をみて手術はそれからだと、綿谷軍医と言いつ争っている様子が何われ、ソ連の医学の遅れを痛感した。

翌日予定通りソ連軍医の執刀で手術は開始するももはや手遅れとなり手に負えず、隣に待機していた綿谷軍医が跡を引き継いでくれた。化膿も治り傷口が塞がるころになった。午後になると毎日発熱が続いた。綿谷軍医は「堀越もう一度腹を切るんだ」と言われた。私は軍医殿に「このままで結構ですから、そっとしておいて下さい」と言っ

たら、「貴様の命はあと幾日も無い」と言われ同意した。

最初の手術は思わしくなく一カ月後に再手術となり、「明日は我が身に」の諺通り今度は私がシベリアの土になる番かと覚悟するも、幸い八人目で、成功第一号となった。粗悪な食糧事情で盲腸患者が多かった。

私の入室中、三年兵の川西衛生兵には大変お世話になり今でも印象深い。河南作戦での戦闘中負傷者が続出し治療中、自分も右大腿部貫通銃創を負い弾雨の中一人で傷口をヨーチンで消毒治療した勇猛な衛生兵で、このラーゲルの医務室で食事の世話やら包帯交換と親身にも及ばぬ温かい看護を受けた。九州出身の綿谷軍医殿とは正に私の命の大神人でした。

ポセツト港より北朝鮮の清津へ上陸

チエレンホーボの医務室で腹部に大きな二本の傷跡を残し結果は順調に快復途上、東京ダモイの朗報が入り、対象者は栄養失調、伐採や凍傷によ

る手足の切断者等で、アッペ「盲腸」患者は対象外と言われたが担当の保育中隊長が弘の四中隊長「田池勇」氏の計らいもあり九死に一生を得て北朝鮮古茂山セメント工場へ移動、日本企業の小野田セメントであった。原石のトロッコへ積込作業は重圧が手術後の下腹部へ食い込んだ。隣の富寧にはカーバイト工場があり大きな煙突から白煙が黙々と上っており、日本の抑留者達が働いていた。ここまでたどり着き、あと少しの辛抱だとお互いに励まし合うも栄養失調の悪化と伝染病の蔓延で力尽き、山腹の赤松林に眠る数千人の友、毎日五人、十人と亡くなられた。白いご飯を腹いっぱい食べてから死にたいと言って去って行った友。心から哀悼の意を表し御冥福をお祈り致します。今日の日本の繁栄は先の大戦で亡くなられた御霊の上にあることを忘れてはならない。

後記

第二次大戦の終末期に遭遇し、北支から自宅へ。写真と遺髪、遺爪を送り届け戦場へと、抑留生活

を通じ多くの同胞を失った。「この労苦は貴様が書いてくれよ地下に眠る戦友達の叫びと思えてならない」。

あの戦争を知らない戦後生れの国民が三分の二以上を占めるといわれたのは数年前のこと。敗戦後六十余年を経過し私は人生節目の傘寿を過ぎ今は白髪光頭の身となり、視力、聴力、記憶力、共に低下し、国民の片隅に追いやられようとしている。悲惨な戦争は再びあつてはならない。生還してきた我々には是非次世代へ語り継ぐ責務があり、断片的ですが当時の記憶の糸をたどりながら書きました。

毎年举行される九段会館でのシベリア死没者全国慰霊祭と、千葉県支部主催の護国神社隣の祈念碑前での慰霊祭に参加して、六十余年前の青春を酷寒、凍土の荒野に不帰の人となられた六万余人の御霊に往時を偲び、靖国神社と千鳥ヶ淵戦没者墓苑を参拝し静かに余生を送っている。

戦後初めての大阪万博でソ連館を見学した。四

メートル四方もある大きなパノラマでソ連にはこんなに近代化された露天掘り炭坑がありますとチエレンホーボ炭坑の宣伝をしていた。しばらく説明を聞いていたが私は懐かしさもあり思わず、この炭坑は我々日本人の抑留者が白樺林を切り開き多くの友を失いながら造ったのですと言った。するとソ連の係官は日本語で「どうも御苦勞様でした」と深く頭を垂れ、それでは記念にソ連館のバツジをさしあげましょうと胸に付けてくれたのは思い出の一つであつた。

【執筆者の紹介】

現住所 千葉県香取市栗源町

生年月日 大正十四年十月二十八日

学歴 昭和十五年三月 栗源尋常高等学小

校卒業

兵歴 昭和十九年十二月十日 柏東部八十

三部隊入隊

昭和十九年十二月二十五日 北支派

遣弘一七師団 独歩二〇五大隊
河南省杞県 第四中隊に配属

昭和二十年四月 第三次河南作戦に
参加

昭和二十年八月七日入滿 敗戦は南

新京 武装解除は公主嶺

昭和二十年九月二十日 満州里經由
入ソ チェレンホーボ第八收容所

昭和二十一年七月 北朝鮮古茂山収
容所へ移動

昭和二十一年二月二十三日 興南港

より太瑞丸（第四番船）にて佐世保
に上陸 復員

復員後の役職 農事組合長、区長、土地改良、

構造改善事業の役員、神社総代、

香取神宮崇敬会地区委員等歴任、

現在は菩提寺の総代

（千葉県 兼平 正二）

シベリア抑留体験記

福井県 田 畑 覚 意

昭和二十（一九四五）年八月二十六日、満州国
奉天省熊岳城にて武装解除。

昭和二十年十月八日、大連か旅順かうラジ奥斯
トックから日本へ送還してやると貨車に乗せられ
北へ北へ満州里を經由してチタ州西方二十キロ炭
坑の町チェルノフスカヤ駅到着、第四收容所に収
容された。

收容所は半地下式で、宿舍の両側に入口があり、
中央を通路にして両側が二段ベッドになっている。
收容所の周囲は三重の鉄条網で囲まれ、ソ連兵が
自動小銃を持って監視している。收容所入所時、
ソ連兵の身体検査があり、時計のネジのかけ方も
知らない兵が腕時計や万年筆が珍しくて取り上げ、
ソ連はうそつき、泥棒のようである。

知能が低い、無理もないソ連兵や労働者は掛け